

センター つらりん

No.110



子どもの風景 第9回

電話の練習

玉緒(小4)

わたしは、
電話がきらいだ。
ブルブルルと音がすると、
ドキッとすると、
一人で家にいるとき
電話が鳴った。
どきどきしながら受話器を取って、
「もしもし田中です。」
「お父さんいますか。」
「います。」
外にいたお父さんに
「おとうさん電話だよ。」
ちゃんと出られてよかったあとと思った。

台上前転

洋(小4)

体育で、台上前転をした。
私は、台上前転が苦手だ。
うまく回れる人はいいなと思った。
私は、
「早く終われ。」
と何度も時計を見た。
先生は、
みんなを後ろにすわらせた。
とび箱の前に、隆君と翔君がいた。
私は、隆君が回るのを見た。
隆君は運動神経がいいから、
まっすぐに回れているのを見て、
すごいと思った。

目次 2023年3月

子どもの風景(第9回)	1
特集Ⅰ 子どもと共に生きる教師へ	
響き合いのある教室	齊田 久典 2
学びの場へ参加しよう	山形 慎一 5
自分なりの「こだわり」を持って	石井 宜 6
教師は、世界を問い続ける	南部 拓未 8
若い教師が「生きづらさ」を 乗り越え、成長できるには	久保 健 10
特集Ⅱ 子どもたちと平和を考える2	
子どもたちと『動物会議』を読む	菅井 仁 13
「大人はなぜ戦争をするの?」に 応えて	数見 隆生 14
未来の大人のみなさんへ	小野寺修子 14
大人はもっと子どもの意見を聞いた方がいい	
	東田 晃 15
	石川 裕清 16
	17
「大人の常識」は、現実的か? 教員志望の学生の感想から	
わたしの出会った先生 39	鈴木 吉雄 19
授業への招待⑨	
「だ液」の消化実験	多田 博茂 20
おすすめ映画	伊藤 真弓 22
読書のすすめ(第11回)	久保 健 22
相談センター報告(第30回)	さとうゆきこ 23
ひと言	千葉 建夫 24
子どもの風景 作品について	高橋 三代 24
センターの動き・編集後記	24

特集Ⅰ

子どもと共に生きる

教師へ



響き合いのある教室

齊田久典

はじめに

ある小学校で5年生を受け持った時、国語の物語文で「春先のひょう」という作品に取り組んだ。春先にひょうが降ってきて、兄弟の1人が「ひょうだ!」という時、もう1人が「ライオンだ!」と言つて、おどける。そのひょうを見て、お母さんが、戦争中の看護婦（看護師）をしていた時の、思い出を語り始めるという話である。自分なりに授業を進めて、物語の最後には患者さんとお母さんが結婚したという結末（その患者さんが兄弟のお父さん）を、みんなでほのぼのとした気持ちで読み終わったなあと思ひ、感想文を子どもたちに書いてもらった。すると、ある女の子が「この話はこわいです。ひょうやライオンが出てきてとてもこわい話

です。」というようなことを書いていた。この子にとっては、この物語の話も授業の本身も全く理解せず、約10時間近くの国語の授業が苦痛だったに違いないと思った。何をしていたのだろうか、自分が恥ずかしくなった。子どもの様子や表情も分かってとせずに、何人かの子どもたちと授業を進めていったことが、とても恥ずかしかった。

その後、物語文を子どもと一緒に、楽しんで読むにはどうしたらよいかということ真剣に考えた。サークルでも、自分の実践を検討してもらった。そして、少しずつではあるが、物語文の授業の進め方らしいことが分かってきた。その授業が面白いかつまらないかは、子どもたちの表情を見るとすぐ分かる。それを無理矢理、自分の考えを押し付けたり、教え込んだりすると、子どもたちは、とたんにしらけた顔になったり、つまらなそうな顔になったりする。教師の中には、そういうことを分かっているが、時間が無いとか、この子どもたちは頭が悪いとか、自分の都合のいいように考えて、授業を進めていく者もいる。自分の勉強不足や寛容性の無さを棚に上げて。

ここでは、みんなが知っている「ごんぎつね」の授業実践を、その当時、毎日出していた「学級通信はぐるま」をもとに話を進

めていく。

「ごんぎつね」の授業

お昼が過ぎると、ごんは、村の墓地へ行って、六じぞうのかげにかくれていました。いいお天気で、遠く向こうには、おしろの屋根がわらが光っています。墓地には、ひがんばなが、赤いきれのように、さき続いています。と、村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴ってきました。そう式の出る合図です。

ごんは、村のことは何でも知っている。もちろん、そう式でお昼がすぎないと、墓地にやって来ないことも。六じぞうのかげにかくれている状況を学習しているとき、T君が「何でここで急に天気のことが出てくるんだ？」とつぶやきました。「そうだよ、先生も不思議だったんだ。天気だけじゃなく?」「ひがんばな。」「そうだよ。じゃあ、ここは、その後の『と』と結びつけて勉強しよう。『と』は、『すると』と同じ使い方です。先生が教室に came. すると静かになった。何かの動きがあつて次の動きなんだけど、この文は?」「ひがんばながさき続いています。するとかねが鳴った。」「なんか変だ。」「ごんの動きはないのかなあ?」「ごんが見てるんだ。」「うん、ひがんばなをきれいだなあーと見てる。するとかねが鳴ったんだ。」なるほど、読みが深まっています。

ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

ごんはお念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいた。それほど話の続きが聞きたかった。こんなことは今までなかったことを子どもたちと確認しました。T「兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。」の主語と述語は? C ごんはー行きました。



T そうだね。どんなふうに行ったの? C ふみふみ。

C 「ふみふみ」は「ふむ」の強め。

T そうすると地面を強くふんでるのかな?

C ……(考えてる)

T だれのかげなの?

C 兵十の。

T そうだね。なぜ加助のかげじゃないの?

C 兵十の話を聞きたい。

C ごんの頭の中は兵十のことでいっぱいだから……もつと近づきたい。

C 兵十の考えていることをもつと知りたくて。

C 兵十と加助が別れても兵十の後をつけていけるので。

※この「くふみふみ行きました。」の文では、若いころ勤務した学校で、年配の先生と話したことがある。私は、「ごんの兵十への思いが『ふみふみ』に表れている。」と言ったが、年配の先生は「そんなことまでは分からない。何でそんなふうに読めるのか？」というようなことを言っていた。しかし、作品がそのまま、ごんの思いを書いていて、子どもたちも見事にそれを言い当てている。

ひとりぼっちのごんが、同じ境遇になった兵十に対して、初めは償いからかもしれないが、今では自分の友だちのような思いで、毎日を過ごしている。そして、少しでも兵十に近づきたいという思いが「ふみふみ」に表れているのである。

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」
「ごんは、ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。
兵十は、火なわじゅうをばたりと、取り落としました。
青いけむりが、まだ、つつ口から細く出ていました。」

T 「ごんは、ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。」の文で、ごんは生きてるの？ 死んでるの？

C 生きてる。

T 何で、どこで分かりますか？

C うなずいたから。

T そうだね。死んでいたら、うなずけません。うなずく時ってどんな時？

C 分かった時。

C 相手の言ったことが、いいという時。

T ここでは何がわかったの？ 何がいいとごんは言っている

の？

C 兵十が、くりやまつたけを持ってきてくれたのは、おまえだったのか、ときいてそれに対してそうだよと言っていること。

T そうだね。その時ごんは、どんなことを思ったのかなあ？

C ようやく分かってくれた。

C 自分がしていることを教えたいけど、教えられないごんだったけど、今、ようやく兵十に知らせることができてうれしい。

C わかってくれたこともあるけど、自分の命を犠牲にしてうなぎのつぐないができたんじゃないかなあ。

「うなずいた」ことに関してはこのように、だいたい、ごんがうれしかったという意見が多く出された。

T 兵十は火なわじゅうを取り落とすんですが、落としたことを自分でわかっているのかなあ？

C 分かっていない。兵十は後悔しているから。

C 自分をせめている。なんてばかなことをしてしまったんだろ

う。
C 自分がやったことについて、罪を感じている。自分のことを思っているごんを殺してしまった……って。

C そういうことで頭がいっぱいだから、落としたことなんか分からない。
(兵十の後悔の気持ちの意見が続く)

おわりに

「ごんぎつね」の授業の様子を、学級通信に載せたものを中心にまとめてみた。全部の学級通信の記録はこの5〜6倍くらいあるのだが、紙面の都合上、抜粋した。物語文を子どもたちと読み合うことは、私にとって、とても楽しい時間だった。自分の考えを押し付けるものではなく、この文を子どもたちはどんなふうに

読むのかなあと、いろいろ想像したりすると、早く子どもたちの考えを聞きたくなる。子どもたちも、自分の考えを発表し、それを私や友だちが取り上げると、ますます発表が楽しくなってくるようである。その時の表情は、また何とも言えず輝いている。お互いの考えを発表し、それにこたえる響き合いのある教室は、それだけ子どもたちにとっても居心地のいい場でもあるようだ。教師はそういう場を常に提供しなければならない。

(大崎市・元教員)

学びの場へ参加しよう

山形 慎一

『真っ白い画用紙にどんな色を塗るかは、先生次第!』

私が教員2年目の時。全校30人くらいの小規模校で、児童会行事の「七夕集会」に子どもたちに「何をさせたいか」「どんな集會にしたいのか」を先生たちで十分に話し合わず、子どもたちに取り組ませた時に、校内の初任研担当の先生に言われた一言です。この言葉を胸に刻み、今も子どもたちと向き合っています。

「真っ白い画用紙に子どもたち」「色に教師の引き出し」と、自分なりに理解できたのは、数年後でした。一度、白い画用紙に塗ってしまった色は、消すことができない。だからこそ、多くの種類の絵の具(引き出し)を持って、その場その場にあつた色を子どもたちに選ばせるとよい。今は、このように考えています。また、若い時には、2色、3色しか絵の具の色を持っていなくても、あ

せらなくてもいいと思います。周りの先輩から借りてもいいし、自分が持っている色を混ぜてもおもしろいし、時には子どもから色をもらって画用紙に色と一緒に塗ってもいいと、今は思えます。若い時はがむしゃらだったので、1〜2色で何とかしようとしていました。

多くの失敗は、その分、自分の力になります。「涙の数だけ強くなれるよ」という歌詞ではありませんが、「失敗の数だけ大きくなれるよ」「ドンマイドンマイっ! 次がんばろう!」と、初任者や若い人たちが多く中、そういう環境づくり、雰囲気づくりをこれからも続けていきたいと思えます。

『それいいね〜! よしっ。来週やってみようっ!』

自分のスキルをあげようと、多くの書籍を買ったり、今ではスマートフォンやパソコンでポチポチ、カタカタと「ググ」ったりすれば、「算数の教え方の極意」「学級崩壊を起こさない指導法」等が簡単にみつかります。しかし、私自身大事にしていることは、「生(なま)に勝るものはない!」ということ。生(なま)というのは、実際に先輩や同期、後輩の実践を「見たり」「聞いたり」して、それを自分で即「やってみる」ということです。



私が所属している宮城県教職員組合には、魅力的な先輩方や頼もしい後輩がいたり、気楽に語れる同期がいたりします。そこで行っている学習会に、よく足を運んでいます。学習会の内容は、幅が広くジャンルも豊富。そして「深い」「楽しい」「おもしろい」内容が盛りだくさんです。官制の研修会では、学べないことがたくさん学べると思っています。私が、ほぼ毎年やっていることを一つ紹介します。

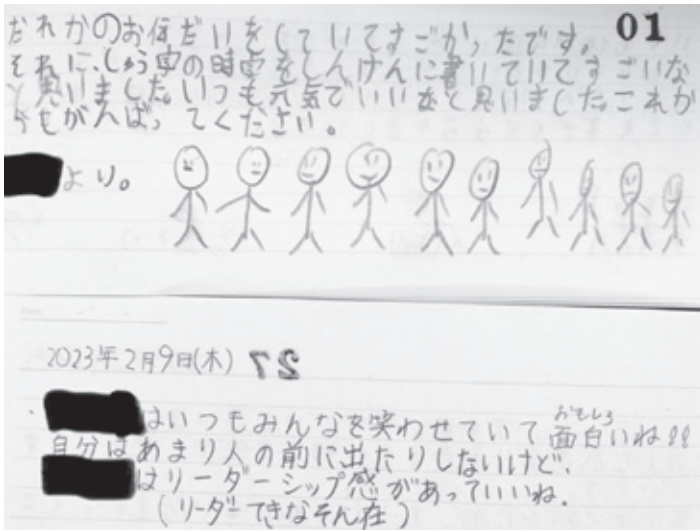
「いいことノート」

- ・用意するものB5サイズのノート（できれば表紙が無地のもの）を裁断機で3〜4等分にしたノート
- ・やり方

①子どもに配り、もらったら自分の名前を1番後ろのページに書いて、1度回収。

②（できれば帰りの時間にも余裕がある時の）朝に子どもに1冊ずつ配る。もらったら後ろのページを見る。もし自分の名前だったたら、先生が持っているノートと交換。

③1番後ろに書いてある仲間の「がんばっていること」「いい



こと」を1日中探す。

⑤ノートを配られたときに、だれのノートか聞かない、言わない。これは結構大事。

⑥帰りの時間に、持っている子の1日の中での「がんばっていたこと」や「よかったこと」を書く。

⑦「はい。どうぞ。」「ありがとう。」を、必ず言って渡す、もらう。

これは、組合の青年部学習会で後輩に教えてもらいました。子どもたち同士が認め合えるようになるきっかけになる実践の一部です。

（宮城県・利府小）

自分なりの

「こだわり」を持つて

石井 宜

同期や先輩方が支えてくれた1年目

恥をさらすようだが、初任のときに持ったクラス（中学2年）は学級崩壊してしまっただけ。今振り返ると、ようやく教員になれた喜びが先立ちすぎて、具体的にどんなクラスにしたいか、社会科の教員としてどのような授業をして何を教えたいのかなどの具体的な見通しを持っていなかったことが一番の原因だったと思う。

このように大変な1年間を過ごしたが、それほど辛いとは思わなかった。いや、思わずにいられたのである。それは、同期（新任の2人）と先輩方の存在であった。週に何回も一緒に食事に行っ

たり、ときどきビリヤードをやったりと、気持ちを紛らわせ、「翌日も学校に行こう」というエネルギーをもらえた。この同期や先輩方とは、今でも交流が続いている。当たり前だが、若い先生方にもこのような人間関係を構築してほしいと思う。少し話題がずれるが、某先輩の「荒れたつていい。俺たちが団結していれば何も怖くない」という口癖が、その後の私の座右の銘の一つになっている。

教員としての柱を築けた2年目

そして2年目。今度は1年生の担任になった。そのとき、私が危惧したのは、3年生になった生徒たちが私の失敗や駄目さ加減を1年生に吹聴することであつた。そして、それに打ち勝つには、自分が頑張っていることを、多くの1年生や保護者に認めてもらえるように、具体的な努力をするしかないと思つたのである。

私が実行したのは、①社会科のプリント（ワークシート）を毎時間作つてそれを基に授業を進めること、②学級通信を月に数回発行することの2つだつた。当時はワープロが普及し始めたばかりで、私の周りで毎時間のようにプリントを作成する教員はあまりいなかったと思う。また、今なら当たり前の学級通信も、ほとんど発行しているのを見たことはなかった。それゆえ、私の実践はきちんと評価してもらえ、当初抱いていた危惧を払拭することができた。

以後プリントを作り続けて34年間

今はパソコンやタブレットを使って授業を進めるのが当たり前だが、所詮私は古い人間。今でもプリントを作り続けている。もちろん、毎年ほとんどのプリントは（教科書の内容が変わつてい

てもいなくても）部分的な改訂を、またときには全面改訂もしている。しかも、その枚数が半端ない。今年度（1年生担当）も、授業用のプリントだけでも250枚になる。3年生を担当したときには500枚以上になったこともある。

私がプリントを作り続けている理由は、いくつもある。まずは、「誰でも分かる授業」を目指しているからである。やはり、学校生活の基本は授業である。「（授業が）分かって楽しい」のだければ、本当の意味で「学校が楽しい」とは言えないと思つている。私のプリントは、原則教科書の順番通りに一問一答式になっていて、資料集を見て答える問題も何ページのどこを見ればいいのかを明示してある。授業はほぼプリントに沿つて行うので、挙手しやすいし、指名したときにも答えやすいというメリットがある。また、その気さえあれば、自分で調べて予習したり、確認することができるのである。

また、授業の流れのなかでプリントの適切なところに、必要な資料を自由に挿入することもできる。教科書や資料集に載っている資料だけでは、本当に必要なものが揃わないことが多い。「ここではこれを教えたいからこの資料も必要」「こういうことに気付けたい・考えさせたいからこんな資料がなければならぬ」などの「こだわり」も私たちには必要なのではないだろうか。また、プリントに載せた資料は、そのプリントを捨てない限りいつでも見ることができるのもポイントだと思つている。

私はプリントでそれらを具現化させているわけで、もちろんパソコンやタブレットが得意な人は、それを生かして授業作りをすれば良い。ただ、「見せる」ことを意識しすぎて、「何を教えるのか」などを忘れてはいけない。このことだけは肝に銘じてほしい。一方、プリントには当然デメリットもある。例えば授業が単純になりがちだという点である。随時考えさせるような内容は入れてい

るが、流れ作業の中でやって終わりという傾向があるのも否めない。もつとも、パソコンやタブレットの授業でも、連続して画像や資料を見せて満足してしまうようなことだけはないようにしてもらいたい。

主権者教育と「社会科通信」の発行

ここ10年くらい、私が一番力を入れてきたのは主権者教育である。主権者教育というと、公民的分野が中心であることは言うまでもない。たとえば、昨年度の3年生では、「夫婦別姓を認めるべきか」「税金を納めている」永住外国人に地方参政権を認めるべきか」「選挙に行かないと罰金を取る強制投票制度を導入するべきか」「国民審査(制度)は税金の無駄遣いだから廃止すべきか」などについて意見を書かせ、それらの意見からピックアップしたものをまとめて「社会科通信」として発行した。

しかし、それだけではない。ここ5年くらい、原則私が選んだ4つの新聞記事などから1つ選び、それについての意見・感想を書かせ、やはりそれをまとめた「社会科通信」を発行している。新聞記事を読ませて、意見・感想を書かせるという学習を通して生徒たちの社会への関心を高めさせることが、主権者教育につながるかと考えているからである。もちろん、ときには私がニュースを紹介することもあるが、私が解説するよりも、級友たちなどの意見・感想を読んだ方が、絶対に心に刻まれると考えている。

組合や民教研で鍛えられた自分

2年目から組合に入っていたが、決して熱心な活動家ではなかった。しかし、約20年前から教研集会(今は「教育のつどい」)の実行委員を務めるようになり、ほぼ毎年レポート報告をし、その結果たびたび全国教研に参加するようになったことで、より授

業作りを頑張るようになったと思う。また、民間の教育研究会(私の場合は宮城県歴史教育者協議会)でも多くのことを学んだ。忙しくてそんな余裕はないかもしれないが、ぜひ自分で研修の場を広げていってほしいと思う。

(仙台市・八木山中)

教師は、世界を問い続ける

南部 拓 未

「学ぶことって面白い！」次のステップを歩もうとしているみなさんに向けて言葉はこのことに尽きると思います。

私は現在、高校で理科の教師をしています。教師の最大のやりがい「子どもたちから学べること」だと私は思っています。子どもたちは、当然自分と異なる人生を歩んでいるわけです。それら彼女らが考えていること、感じていることは、時代や社会環境や関係性によってどんどん変わっていきます。そこにアンテナを伸ばすと、学校というのは驚くほど面白い場所に思えてきます。その感性のるつぼの中に教師が新たな価値観を、「学問」を通して投げかけることができるのは本当に幸せなことです。相互に学ぶ世界、とくに教師がその一番面白いエッセンスを体験できる場所、それが学校だと思います。

だからこそ、教師は「学問」を深く体現していかなければ、子どもたちにより良いものを提供できないと私は考えています。もちろん、知識の量やテストでいい点数が取れるといった、単純な

ものが「学問」ではあり
ません。世界の認識を広
げ、未知のものに対して
考え悩み、向き合うこと
が「学問」の醍醐味です。

私は地球科学が大好き
なので、景色や地層を見
るたびにどんな意味があ
るのかを考えます。しか
し、そこからメッセー
ジを読み取ることはすこ
難しく、1つの正解があ
るわけではありません。



それでも「問い」続けることにこそ意味があります。私の大学時
代の恩師が、「ある場所の地層を、もう半世紀以上にわたって何
度も観察しているが、いまだにその答えがわからない。今でもそ
の場所に行っては悩み続けている」ということを言っていました。
その「問い」に対する向き合い方が素敵だなあ、と感じたものです。
私もそうありたいと思い、学生時代は構造地質学に関する研究を
続けました。

教師になったあとは、学んできた学問と社会との切り結びを意
識しながら理科教育に取り組んできました。こうした視点で考え
たとき、私が重視したことは2つあって、1つは防災教育に取り
組むことでした。地球科学は私たちの社会と自然との関わり方を
学びます。その時重要となるのが防災です。災害との向き合い方
をどのように子どもたちに伝えていくか、日々悩み意識しながら
教科指導に取り組んでいます。もう1つは科学の論理性を伝える
ことです。科学が人間にもたらす最大の意味は考え方であり、自

然を捉える哲学であると言えます。それは必ず子どもたちの生き
方に影響すると私は考えています。そのためにも、自分自身が学
び続け、子どもたちへと還元していく。このサイクルを絶え間な
く取り組んでいくことが教師の役割であり、その実践者である
という誇りを持つことが私は大切であると思います。

ありとあらゆるものになぜを問い、考え続ける姿勢が教師の資
質です。そのエッセンスはありとあらゆる学問に存在しますし、
とくに教師は子どもたちの感性と触れ合う中に「問い」を見続け
てほしいと私は思います。彼ら彼女らが心を震わせたときや、自
分の考えと違うものを感じたとき、私は楽しさを強く感じます。
そんな学びの面白さを子どもたちが感じてくれれば最高に嬉しい
ものです。この世界のありとあらゆるものから問いに繋がる気づ
きを拾い出していく。時には子どもたちと共有していく。教育は
そんな教師と子どもたちの感性をあらためて問われる場所です。
ぜひみなさんも「学び」の醍醐味を味わいながら、教育の面白さ
と奥深さを刻みながら日々を過ごしてほしいと思います。
ともに頑張りましょう！

(仙台市・仙台三高)

センターつうしん109号(前号)に、以下の誤りがありました。
訂正するとともにお詫びいたします。

・目次のページ

私の出会った先生 38 制野俊弘 16 (誤) ↓ 19 (正)

授業への招待⑧

東日本大震災の学習プラン〜6年生編〜加藤正伸 18 (誤) ↓ 16 (正)

・7ページ 宝井さんの文章末

担任でありたいが思ったと思う。(誤) ↓ 担任でありたいと思う。(正)

・7ページ 終さんの上段最後から下段にかけて
いやなこたり。(誤) ↓ いやなこたりのこたりのこたりにかけて
いやなこたり。(誤) ↓ いやなこたりのこたりにかけて
いやなこたり。(正)

若い教師が「生きづらさ」を乗り越え、

成長できるには

久保 健

教師にとって受難の時代です。事務仕事如山ほどあって教材研究や授業の振り返りが勤務時間内にできません。保護者への対応も大変です。職場の管理体制と監視的なまなざしがきつく、同僚といいた人間関係が結びにくくなっています。加えて、いじめ、暴力、不登校、発達障害や学習障害その他の特別な配慮や支援を必要とする子どもが増えています。そしてそれらが合わさって、世界でも例を見ないほど長時間のブルシットジョブ（意味のない仕事）が強いられています……。こうした困難は若い教師にとってはとりわけ深刻で、せっかく教師になったのにやりがいを見いだすことができず、病休、さらには退職に至る教師が増え続けています。そうした時代を生きる若い教師がどうしたらその「生きづらさ」を乗り越え、成長し、やりがいのある教師人生を送れるようになるでしょうか？

1. ある体育授業の風景から

昨年の5月、小学校1年生の体育授業を参観しました。授業のテーマはマリオ・ワールド。学習指導案は、障害物のある4種類のステージをつくり、それらを一つひとつ攻略してから、それらをつなげて総合的な走・跳・投の遊びをするという構想で、当日は雨のため、室内で「ダンボール箱を連続して跳ぶ」ステージを行うことになったようです。

体育館に入ると、先生の前に20人と少しの子どもが座っています。でも、先生の左の手と右の手を握っている子が1人ずついて、その回りを歩き回っている子も1人います。また、支援学級から交流できている子がみんなの後ろの方にうずくまっています。そして、「整列・礼」も「あいさつ」もなく、「今日はスーパーマリオになって箱を跳びます」と授業が始まりました。

各班ごとのコースに、子どもたちが1個ずつ、テレサやクッパ（マリオのキャラクター）などの絵を描いたいろいろな形と大きさのダンボール箱を持ってきて、すきなように並べて跳びはじめました。みんな楽しそうにとんでいます。交流できた子（Yさん）も、はじめは支援員に手をひかれて跳び、やがて1人で跳ぶようになりました。しかし、そうした中で1人（Mさん）が真ん中に座り込んでいます。また時々自分の箱を抱えてあちこち動き回っています。そのMさんに先生が話しかけていたので後で聞いたら、「私はマリオのピーチ姫に囚われているので、マリオになって跳ばないの」と言ったそうです。ただし、見ていると授業展開の節々で子どもたちが集って話を聞いている時に、Mさんは1人で箱を跳んでいました。……（授業の詳細は省略）……授業終了後、先生はMさんとYさん、それにもう1人（Bさん）を残して「居残り」学習を試みました。その時、Mさんは、Yさんがいることは認めたものの、Bさんを指して「なぜいるの？」

と不満そうでした。それに対して先生は「彼女は転んで保健室に行つてあまり跳べなかつたから」と応え、それでMさんは納得して3人で楽しそうに箱を跳んでいました。

授業後の検討会で、参観していた教職志望の学生が「授業の始まりが衝撃的だった」「教育実習、たつたらきつく指導される」と述べました。現職教員の参観者も「整列とあいさつは体育の常識!」「ある程度の学習規律は必要なのは?」と言いたげな顔をしています。

それに対して、授業をした先生は次のように話しました。

「今日で5回目の体育授業です。子どもたちはまだ友だちの名前や性格もよくわかつていません。学校の決まりや授業の約束になじんでもいません。そんな子どもたちに、規律から入るよりも、どの子も楽しくやれて発達がうながされる教材を用意して、自分のやりたいうことができる安心感の中で、学習を楽しむことを優先して、子どもたちのつながりをつくりながら、ゆつくりと学ぶ集団に作りあげていきたいのです。」

また、「居残り学習をした子どもは特別扱い?」という質問にはこう答えました。

「授業中は集まっている子どもたちの集中力を散らさないことに気を配りました。でも、その輪の中にいない子どもたちも箱跳びをやりたいがっていると感じたので、その要求も保障しなかったのです。特別扱いと言うなら、今は子どもたち一人ひとり全員を特別扱いしています。」

2. どちらを向いて、どんな教師をめざすのか

この先生は40歳代。管理職や同僚たちがそのやり方を必ずしもよしとしているわけではありませんが、これまでの低学年経験の豊富さと実績で許されています。

では、もしあなたがこんな子どもたちの担任になったら、どんな学級指導や授業づくりをする・できるでしょうか? まわりを見渡すと、生活や学習の規律については「〇〇スタンダード」や「ゼロ・トレランス」の花盛りです。そして、その通りに子どもをきちんとさせられる教師が「できる教師」で、そうでないと「できない教師」だという「まなざし」が向けられます。また、授業の進め方については、

学習指導要領解説を

はじめとする教育マニ

アル、映像資料、AI

教育アプリなどがあ

ふれています。そして

それらの通りに授業を

すれば何とか「そこそ

こ」の授業はできるか

も知れません……。で

も、それに安住してエ

スカレーターに乗って

いったら……教師の仕

事に生きがいを感じら

れるでしょうか? さ

らに、GIGAスクー

ル構想が進んでいつた

ら、そんな教師は、教

員免許の無い特別〇〇

員や教育アプリ、有名

教師によるオンライン授業

に取って代わられて「要

なし」になって

しまいかねません。

3. 教育実践記録のすすめ

しかし、それに反発して、学級指導や授業づくりで「我が道」をめざすのは、若い教師にとって生やさしいことではないでしょう。でも、せっかく努力して希望する職についたからには、やりがいのある教師人生には是非チャレンジしてほしいと思います。

若い教師が「自分はこういう学級づくりや授業をしたい」という具体的イメージや実践する力量を持つのは困難でしょうし、そう主張しても「よし、やってみろ!」とはなりにくいでしょう。どんな管理職や学校の方針、同僚や先輩教師の中にあるのかによって異なるでしょうが、とりあえずは「スタンダード」やハウツー本、先輩



この写真は授業のものではありません

教師の指導や助言なども「したたか」に付き合いつつ、教育指導の経験を積み、教師力を培っていきましょう。

そうした中で教師としての成長の糧となるもの・ことは幾つかあると思いますが、ここでは特に、教育実践記録を読むことと、そして、自分で教育実践記録を書くことを勧めたいと思います。

まずは、すぐれた教育実践記録をたくさん読むことです。日本の教師は、戦前・戦後を通して劣悪な教育条件の下に置かれてきました。そしてその中で、諸外国と比べても授業だけでなく生活の指導や人間形成をも自らの守備範囲として大切にしてきたという特質をもっています。それゆえ、日本の教師たちが心血を注いで取り組んだ教育実践の記録は、一般の教育学の理論書やハウツー本よりもはるかにすぐれた具体性と総合性を持った「宝の山」なのです。しかもそれらはとても読みやすいものになっています。私もかつて、体育大学に入学したのはよいが競技者としての才能のなさに打ちのめされ、「これからどうしよう」と悩んでいた時に、「これならやってみよう！」と「教え・導く」側に向かうことに目を開かせてくれたのは、佐々木賢太郎の『体育の子』（新評論、1956）という教育実践記録でした。それ以来50年以上、体育だけでなく、各教科や教科外教育、生活綴方などのすぐれた教育実践記録をたくさん読み、そこから多くの貴重なこと・ものを学んできました。

次に、教育実践記録を書くことです。「そんなこと、むずかしそう！」と引かないでください。まずは「教育メモ」づくりから始めましょう。子どものこと、学校や同僚のこと、保護者のこと……何か気づいたこと、悩んだこと、うれしかったことがあったら、メモを日記風に書き留めておきましょう。そして、そのメモがたまったらのを眺めていると、短い断片と断片の間に幾つかの「つながり」や「まとまり」が浮かび上がってきます。そうしたら、その「あの子の言動をどう捉えるか?」「教材は適切だったか?」「言葉かけや指導の手だては?」……について簡単なワンポイント問答集をつくってみましょう。前述の授業の先生だったら、「MさんやYさんはこれまでどういう生育過程を経てきたのだろうか? どう働きかければいいのか?」とか、「残りの10ヶ月、この学級の子たちをどう関わらせ、各自のやりたい

こととみんなが集中することを兼ね合わせるのだろうか?」「この学級のみんなが『学びたい!』と目を輝かせる教材は何だろうか?」そしてそれらをどう配列したらいいだろうか?」などと自己問答をしているかも知れません。あるいは、最大の悩みは「来年、この子たちをどんな先生が担任して、どんな学級指導や授業をしてもらえるだろうか?」「そこをうまくつなぐためには管理職や同僚教師たちとどう話し合っていきたいだろうか?」ということかも知れません。ただしこれは、若い教師にとっては少し先の悩みかも知れません。もっと簡単なものでいいのです。それができたら、同じ職場に話しやすい同僚や先輩がいればその人たちに、あるいは他の学校の仲間との集いの場（〇〇カフェとかサークルとか）で、「こうしてみたいのだけど!」と相談して批評や助言をもらいましょう。それは、子ども理解や教材・指導法について「そんな観方・考え方もあるのか」と気づき、「自分は何をやりたいのか」を見つめ直すことにつながります。問題はそうすぐに簡単には解決しないかも知れませんが「明日また少しだけやってみよう」という元気がもらえるでしょう。

そうした日々の教育実践における（やりたかったことⅡやったことⅡ子どもの反応Ⅱ振り返り）のワンポイントを報告し検討してもらおうことの積み重ねを踏まえて、学級指導や授業づくりや行事の企画・運営……などから何か一つテーマを選んで、少しまとまりのある教育実践記録（らしきもの）にチャレンジしてみましょう。そこに最低限書き込むことは、①子どもや学級の様子（できれば家庭や社会の背景も）、②問題・課題の把握、③教師としてのねらい・願いや見通し（こうすればこうなるのではないか、なつてほしい）、④そのための指導の手だてや教材の工夫、⑤実践の振り返りと自己評価（何がどこまでやれて、何はやれなかったか。それはなぜか）などです。はじめは稚拙でかまいません。実践記録を書き、仲間と集団で読み合い、検討してもらおうことを続ける中で、きつと教師としての生きがいと力量がふくらみ、成長していけることにつながるにちがありません。

（宮城教育大学名誉教授・日本体育大学名誉教授）

子どもたちと『動物会議』を読む

菅井 仁



(訳：高橋健二) だった。

簡単に内容を紹介すると、世界中の動物たちが、『国という単位を廃止しよう、すべての軍隊を廃棄しよう』という国際条約を呼びかけ、子どもたちがそれに賛同し、最後はしぶしぶ大人たちの国際会議もそれを承認するという物語だ。

丸一年以上になるウクライナのニュースを見ながら思い出したことがある。32年前の1991年1月、いわゆる米軍による湾岸戦争当時のことだ。私はその当時、宮教組仙台支部(仙教組)の専従をしていた。そして「湾岸戦争をすぐ止めよ」、また「自衛隊の海外派遣を許すな」の行動を呼びかけ、それに呼応して連日のように多くの組合員が、地下鉄駅前や生協店舗前で署名活動を展開した。仙教組単独で500名を超える参加者の集会も開催できた。

その年の4月に現場復帰をしたのだが、その時、教室で読み聞かせに選んだのが、ケストナー少年文学全集から『動物会議』

動物たちは、自分たちの要求を認めさせるために、人間の将軍や政治家たちと戦う。ネズミは国際会議の資料を食べ、蛾の大量は会議場の将軍たちの服を食べて裸にする。しかしこの襲撃作戦は人間の知恵が勝って敗北する。そのとき将軍や政治家たちは、「我々には文書と兵器があるが、動物たちにはない」と誇らしげに言う。たしかに、これらは人間の知恵が作り出したものだが、しかし、これが人間を滅ぼすことになるかもしれない。この襲撃に敗れた後、しかし今度は、世界中の子どもたちが動物に味方して家出するので、子どもの姿は消えてしまふ。そしてとうとう最後には、動物たち、子どもたちが勝利する、という展開だ。

以来、毎年のように、『動物会議』を教室

で読むようになった。その後、池田香代子さんの訳で大型絵本も出版され、もっぱらこの絵本を開いての読み聞かせは退職するまで続いた。それは池田さんが絵本のあとがきで「動物たちは、今日も業を煮やしているでしょう。でも、いやにならずに踏みとどまる心の力が、私たちにはあることを、この絵本に出てくる動物たちといっしょに確かめたいと思います」と書かれていたことに共感し、それが支えとなった。子どもの幸せ・安全を願わぬおとなはいないだろうと強く思うからである。

さて、昨年、3冊の絵本に出会った。ネタバレは避けるが、一つは『そらいろ男爵』。初版は10年ほど前にフランスで出版されたものだが、ストーリーは見事な内容である。もう一つは昨年出版されたイタリアの絵本作家の巨匠ジャンニ・ロダーニの手にによる『キークの月』。ロダーニ

の絵本『キンコンカン戦争』(アーサー・ビナード訳)と合わせて、教室で、ご家庭で、ぜひ子どもたちと一緒に読んでみて欲しい。人間の知恵と感性をまだまだ信じていたいと期待するからだ。



(前研究センター所長)

戦争と平和をめぐる問題は、今や他人事ではありません。自分事として考えなければいけない、そういう時代に入っているように思いません。

つうしん109号発送の際に、センター代表の数見さんが執筆した『大人はなぜ戦争をするの?』に「応えて」を同封しました。同文章は、雑誌『子どものしあわせ』編集部からの〈子どもの疑問に「応えて」という依頼に寄せて書かれたものでした。

同封して送ったところ、読者のみなさんと、文章を読んでくれた大学生から感想や、自分だったらこう応えるという返事などが寄せられました。

改めて数見さんの文章と、読者のみなさんから寄せられた貴重な感想や考えを紹介します。そして、私たち一人ひとりが、この問いにどう応えるか考えていただければと思います。

未来の大人のみなさんへ

小野寺 修子

私は、中学校の教員を定年退職し、今は家族の世話をして生活しています。

毎日、ロシアのウクライナへの軍事侵攻をめぐるニュースに触れ、暗い気持ちになります。みなさんは、学校や家庭そして地域の中で、人とかがわることを通し、たくさんのことを学んでいることと思います。しかし、時には苦手な人や嫌いな人とケンカになってしまう場合もあるでしょう。大人は、国や民族、宗教の間でケンカになると、「戦争」という悲劇に及ぶことがあります、これは人間の歴史においては、「負の部分」と言えます。暴力で解決するとうい野蛮で愚かなことを人間は長い間、繰り返してきた訳です。けれども、人間には失敗に学び、お互い傷をつけない方法で対立を解決しようという知恵もあるのです。そのため、戦争に至らないように、平和を創る努力を続ける大人たちがいるのです。未来の大人のみなさんは、こうした「力の支配」に頼らない大人の生き方に学んでください。そうした志の高い大人に心を寄

「大人はなぜ戦争をするの?」

に「応えて」

数見 隆生

大人だって、多くの人は戦争したいなんて思っていない。

「死んでいい、人を殺していいなんて思っている人はほとんどいない」と思っている。

なのに、戦争は絶えず起こってきた。今も起こっている。多くの人が死んでいる。戦っていない弱い女性や幼い子どもたちもだ。

なぜだろう。なぜそんなむごい戦争、子どもだって「おかしい!」と思うことを、大人はなぜやるのだろう。

日本の昔の戦国時代と言われる頃から、領主という殿様が、自分の領地を広げるために絶えず戦争を起こしていた。その家来や領地の住民は決してイヤだということができなかった。イヤだと反対すれば殺されたからだ。

明治時代になって武士の時代が終わり、天皇中心の一つの国になった。そして、鎖国をやめて外国と交流することになった。が、今度は「富国強

兵」ということを目指し、天皇を昔の徳川幕府(最高権力者)のように祭りあげた明治政府は、徴兵制度(男が20才になると兵隊に行かなければならない制度)を作り、産業を発展させ、外国に侵出して領土を広げ富める国にすることを考えはじめた。その行き着く先が第2次世界大戦だった。

この戦争を起こすことに反対した大人もいたが、反対すると捕まり監獄に入れられたのだ。それで死に至った人も何人もいる。

つまり、大人が皆戦争をしたかったのではなくて、その時代時代のリーダーだった大人たちが、野心を起こすことで、多くの民(一般の人・国民)が「イヤだとかやめよう」と言えない状況がつけられてしまつて、戦争が起こった。今のロシアもそうなんだ。

では、どうしたらいいのだろう。戦争なんかやめようよ。人を殺す武器なんか持たないようにしようよ。領土を増やすなんて考えはやめようよ。もつとお互いの国が平和に暮らせるように話し合おうよ。

せて、深く広く学習を進めてほしいと願っています。

(元中学校教員)

大人はもっと子どもの意見を聞いた方がいい

東田 晃

数見先生の文章を読んで、真つ先に思い浮かんだのは、2013年度に担任した6年生を沖縄学習旅行に連れて行った時のことでした。

4日間の旅行の3日目に、学級集会を行います。そこで、なぜ沖縄戦でこんなにも苦しめられた沖縄に今も基地があるのか、ということが論議になったときに、ゆうわさんという子が「大人はもっと子どもの意見を聞いた方がいい」と発言したのです。

そこまでは、戦争は絶対にやっつてはいけない、基地は必要ではない。平和を作るにはどうして行ったらいいか？ など自分の意見を述べていく子が多かったのですが、一瞬論議が止まりました。「ねえ、ゆうわ、それってどういうこと？」という司会の問いに「だってさ、大人は間違っちゃん。いつも正しいと思ってるかもしれないけど、間違っただから戦争になっちゃったんじゃないの？ 子どもの意見を聞いてたらそうならなかったかもしれないでしょ」とゆうわさんが言ったのです。

なるほど、大人は間違っ。子どもが正しいとは限らないかもしれない。でも子どもの方が正しいかもしれない。そういう子どもの声を聞くことが大人はできているのだろうか？ 討論は進んでいきませんが、このゆうわさんの言葉が今も私の頭に引っかかっているのです。

世界中の大人たちは、もっと子どもの声を聞くべきなのかもしれない。そんなことを、今、弱い立場に立たされて、命の危機にさらされていて、

人間なんだから、そのぐらいの知恵を働かせようよ。人の命を奪う、そんなこと誰にも許されない。そんなことは子どもでもみんな思うよね。そんな考えを持った大人がいっぱい増えて、そういう大人で、国の方針を考える政府を創ればいいじゃないか。そうだよ。国民の多くの人が戦争は絶対ダメ、核兵器や通常兵器を増やすのもダメ、そうでないとまた徴兵制度が作られ、若者の命も危なくなる。そういう大人が多くなれば、平和な国、世界が生まれるんじゃないか。

この命は何のために授かったの。一生に一度しかない命、どう大事にすればいいの。

このからだは何のためにあるの。どう大事にすればいいの。
この目は、悲惨な戦争で命を奪われた子どもの悲しみを焼き付けるためにある。

この耳は、聞こえてくる戦火の中での叫び声を、聞き逃さないためにある。

この口は、そういった悲惨な事実に対して「戦争なんかやめろ！」と言うためにある。

この手は、人を殺す銃を握るためにあるんじゃない。皆と手を握り、握手をして共に生きるためにある。

この足は、敵を追いかけ、近づいて銃を構えるためにあるのではない。銃を捨て、歩みより、握手して肩を組み合うためのものだ。

この人のからだは、支え合い、励まし合い助け合い、みんなで幸せに生きていくためにつくられたんだ。

戦争なんて、馬鹿らしいことをやめよう。子どもでも「おかしい！」と思うことじゃないか。大人として笑われるじゃないか。

恐ろしい戦争が起るかも知れないのに、「国民の命を守るため、武器を一杯買って、防衛に備えよう」「敵が攻めてくる前に攻撃できるようにしよう」などといま日本政府は考えているが、今度こそだまされないようにしよう。私が生まれた年（昭和20年）、誤った戦争に敗れ、何百万の命をなくした反省にたつて、二度と戦争をしないと誓って今の憲法ができた。その初心にみんな立ち戻ろうよ。

(宮城教育大学名誉教授)

意見をいうこともままならない子どもたちがウクライナにも、そして世界のそこかしこに置かれてもいるということを思うと、ますます考えてしまうのです。数見先生の文章を読んで改めてそんなことを思いました。

(東京・小学校教員)

「大人の常識」は、 現実的か？

石川 裕 清

「国と国の利害が衝突したり、考えが違ったりしても、世界の平和のためにはとにかく話し合いで解決するようにしなければならぬ。武力に訴えるのは絶対にダメだ」――私が高校の教師だった頃、大多数の生徒たちの意見はそういうものだった。そういう高校生たちに、多くの大人たちがしばしば次のように語ったのを思い出す。「それは理想だけれど、あまりに非現実的な意見だ。現実はそのなにごとでもないぞ。理想論だけでは世の中は動かないということが、大人になればだんだんに分かってくるさ」と。

先日、日本政府がにわか打ち出した防衛費大幅増の問題で、街頭インタビューに答える大人の姿がテレビに映し出されていた。「ウクライナの戦争とか、北朝鮮のミサイル発射とか見ていると、このままでは日本も危ないなと思う。やっぱりもっと国を守る態勢を整えないと。防衛費増は仕方ない」というのが、その人の意見だった。平均的で常識的な大人の意見だろう。しかし、本当にそうだろうか。その「大人の常識」をここでじっくり検討してみたい。

第1に、「国を守る」とはどういうことだろう。よく口にされるが、これはそんなに簡単なことではない。昔、「大日本帝国」では、それは「国体」（天皇中心の国家体制）を守ることでとされた。だから、国民の生命が失われて

も国土が焦土になつても、犠牲は顧みられなかった。国民主権の現代日本では、さすがに誰もそんなことは考えていないだろう。では、何を守るのか。まずは国民の生命と国土、という答えが考えられる。しかし、戦争となれば、これは極めて難しいことだ。現在のウクライナとロシアの戦争でも、毎日報道されるウクライナ側の惨状はもちろんだが、ロシア側にも相当の戦死者が出ていることが明らかになっている。戦争になつて、1人の死者も出さず、物的被害も皆無で済むなどと考えるのは、それこそ非現実的な絵空事だ。それとも、多少の犠牲は止むを得ないのだろうか。その「多少」に、あなた自身やあなたの家族が含まれる可能性があるとしても？

私が言いたいのは、いったん戦争に突入してしまつたら、とても無傷では済まないということなのだ。戦争に真の勝者などいない、という言葉の意味を改めて噛みしめてみる必要がある。戦争は、始めてしまつたら、終わらせろのは実に至難だ。今のウクライナを見てもよく分かる。だから、戦争になったら……おしまいなのだ。何としても戦争をしないで済むように、常に最大限の努力をしなければならないのだ。それが国民と国土を守ることなのであり、国民の負託を受けた政府のなすべき仕事なのだ、と思う。

第2に、軍備を増強することは本当に国の安全につながるのかということだ。例えば日本が北朝鮮のミサイル基地を攻撃できる装備を持つたとしても、北朝鮮は更に自国の基地を増やし新兵器を備えるに違いない。北朝鮮だけではない。対中国、対ロシア、と仮想敵国を挙げていちいちそれに対抗するとしていったら、とんでもない事態になる。この軍備拡大競争は果てしない悪夢を生むだけだ。国の安全につながるどころか、戦争の危機をより一層高めることにしかならないのは明らかだ。やはり、何とかして武力衝突を避け戦争にならないように不断の外交努力を続ける、それが一番の安全保障なのではないだろうか。

私はいま、『あたらしい憲法のはなし』（1947年文部省発行）の「戦争放棄」の章を読み返している。紙幅の関係で引用は差し控えるが、小中学生向けに易しく書かれているが、ここに述べられているのは、世界平和のための永遠不変の真理だと改めて確信する。多くの人にぜひ読んでほしいと思う。

以上、世の「大人の常識」に疑問を投げかけてみた。「厳しい現実を直視した上での大人の意見」というのが、単なる現状追認になってしまっていないかと思われたからだ。戦争をなくす展望はそこからは生まれようがない。現状に縛られた固定観念から自由になって、停滞した状況を打破して前進をもたらしするのは、いつの世にあっても若い世代の柔軟な思考と行動力だ。18歳選

挙権が実現した今、私は若者たちに大きな期待を寄せている。戦争をなくすために、考え、行動してほしい。私のこの小文がその一つのきっかけになることを願う。

(元高校教員)

教員志望の学生の感想から

「戦争はいけない」に希望

数見先生の応えを読んで、私もその通りだと感じました。大人の何分の一の時間しか生きていない子どもたちですら、「戦争はいけないこと」とわかっているのに、なぜ大人は戦争をするのか、と言う部分がとても印象的でした。

言葉でだけ「戦争をしてはいけません。人を殺してはいけません」というのは簡単ですが、それがなくならないのが悲しい現実だと思います。終戦から年月が経って、戦争の中を生きた方が少なくなる一方で、戦争を知らない子どもたちが増えていきます。戦争について伝え残していかなければいけないとは思いますが、今の子どもたちが「戦争」という言葉を知っていて、なおかつ「戦争はしてはいけないことだ」という認識を持っていることが、嬉しいことではないかと私は思います。戦争を知らない子どもたちでも、戦争の無意味さ、人の命を奪う酷さを感じ戦争はいけないと反応していることに希望を持ちたいです。

話し合いが必要

大人は守るものがたくさんあって、そのためなら何でもできてしまうことがあるんだよ。ただ、「戦争をし

たい」「人を殺したい」と思って戦争があるのでなく、何かを守るために何かを犠牲にする手段をとっているんだろうね。でも、自分の意志を通したいから誰かを傷つけていいという理由にはならないね。だから話し合いが必要なんだ。その話し合いは、自分たちの意見を突き通すものではなくて、相手の立場も考え尊重して、自分たちの思いも知ってもらい、お互いが納得できる解決策を見つげるためのものなんだ。そういう話し合いが出来るようになるには、今みなが学校で勉強していることがとても大事なんだ。「こんなの将来使わないよ」と思っていることも筋道を立てて考える練習になっているから、これをやめましょうと相手に自分の考えを伝えられず、力での解決しかなくなるかも知れないね。だから、今勉強していることも大事なんだよね。

笑顔のあふれる世界に

わたしも数見先生と同じで、今戦争をしている人が、全員戦争をしたくてしているわけではないと思います。わたし自身毎日のようにロシアとウクライナの報道をみると胸が痛みます。報道では、兵士は国を守るために自分の意志で戦争に参加しているようですが、そういう場面を見るとさらに胸が締め付けられます。その報道を見た他国の人の気分をも苦しめ、まさに悪循環を招くものだと思います。戦争の被害に遭った人の援助ができない自分への無力さを感じることもあります。

しかし、今もこれからも戦争は世界のどこかで起り続けると思います。世の中の殺人事件や爆破テロ、いじめが容易に無くならないように、人を傷つける歪んだ思考を持つ人がいなくならない限り、戦争が完全に無くなることは困難でしょう。私の考える最善策は、「戦争はしてはいけない」という考えをもつ人がその意志を貫くことだと考えます。生活をしていると、自分の思い通りにならなかったり、他人にイラつと感じたり、気持ちがチクチクすることは誰だつてあります。嫌な気分になっても自分を見失わない人であり続けようと思つて生活しています。この耳は、人の意見を聞き、考えを広げるためにあり、この口は自分の意見を相手に伝えるためにあります。この繰り返しで、コミュニケーションが生まれ、笑顔の溢れる世界になることを望みます。

だまされてはいけない

その通りだと思います。権力を行使し、弱者を踏みにじり、搾取・抑圧をし、何が楽しいのかと思います。他国の土地を奪い、自国の利益を増やそうと、とても醜いし汚いと思います。声を上げたたくもできない悔しき、国の要請に刃向かおうとすればチクられる管理の目、それによつて人々を苦しめていると思います。

教育作用も、常に決定しているのは行政の人間であり、いいように使われている。終戦直後の民主的な教育から大きく変わってきている。だから、近年になつ

て様々ないじめや不登校といった子どもの叫びとして表われていると思いました。おっしゃる通り、だまされてはいけないと思いました。自分が教師だったら曖昧にしていたかも知れませんが、このように伝えることは大事だと思いました。曖昧にしようとすること自体、戦争を容認してしまうことになるので、しっかりと捉え直そうと思いました。

平和な国をつくる気構え

戦争が起こる原因として、領土問題や資源問題、信仰的問題から政治的な問題など昔から問題になっているものが多い。私の世代の者は戦争を体験したものはいないが、学校で学んできたことや、今のウクライナの状況を見ていて、戦争の恐ろしさは一目瞭然だ。戦争は誰もが経験したくはない。争うことで何も生まれない。むしろ多くの命が失われ、経験的にも悪い方向に向っていくことは皆が知っている。しかし戦争は消えることはない。権力者が戦いを望むとしたら、その方向に進んでしまう。私は戦争をなくすためには、国民一人一人の声を聴き、国民全員で平和な国をつくらうとする気構えが必要だと感じている。

私たちの責任

もちろん、戦争をする行為は反対だし、今後も戦争はなくならなければいけないのです。偉い人たちの野心のために、無関係な何百万何千万もの命が危機にさらされ、失われていくことは、本当はあり得ないことです。でもその偉い人（戦争の仕掛け人）は、私たちが投票で決めてしまった人なので、最も責任を負うのは張本人だとしても、私たちも少なからず非や責任があるとも考えます。戦争を遠くの国、大昔の出来事として捉えるのではなく、身近なもの、いつ自分の国に起こるかも知れないこととして捉えなければならぬと改めて感じます。まずその一歩は、私たちが今の政治・世界に目を向けていかなければならないと思えました。そうした学びがなくて、子どもたちにそのことを伝え

ていくことはできないでしょう。今の自分には、子どもから「大人はどうして戦争をするの？」と聞かれたら上手に答える自信が無いので、これから自分なりの答えをしつかり探していきたいと思います。

強い思いで社会を変える

「なぜ戦争をするのか」とても難しい問いだと思いましたが。結局戦争をしている国の国民も戦争をすることは望んでいない。国のリーダーの考え一つで大きな戦争を起こすことができちゃう、と言うことを私自身も改めて感じました。戦争のない世の中にするには、「戦争なんておかしなこと、やっつてはいけない」という考えを、世界中の人が持つしかないと考えます。子どもたちには、「戦争は2度としてはいけないこと」と言う意識をこれから先もずっと持ち続けて欲しいなと思いました。そして、そういう考えを持った立派な子どもたちが大人になり、リーダーとして社会を少しずつ変えていければ、戦争も少しずつ減っていくのではと考えました。世界中の戦争で苦しんでいる子どもが大きくなったときに、その国を変えたいという強い思いで社会を変えていければ、いろいろな国にも平和が訪れるのではないかと思います（そんなに簡単ではないことはわかりつつ私の願いです）。

国民の願いを忘れないで

大人は、自分たちの利益のために戦争をするのだと思います。先生の文にもあるように「大人だつて多くの人は戦争したいなんて思っていない」と思います。誰だつて死にたくないし、人を殺したいなんて思う人はいません。死には悲しむ人が必ずいること、大人なら誰でも知っているはず。しかし、それでも自分たちに何かの利益があるから戦争をしてしまうのだと思います。金や地位、権力を得るためなら命を奪っていいなんて考えは、世界中の誰にも持つて欲しくないです。文章にもありましたが、私たちの命・からだ、目・耳・口・手・足は、人を悲しませるためにあるもので

はないです。自分の子どもが、人を傷つけ、悲しませるような子に育って欲しいと願う親はいません。母親がお腹を痛めて生まれてきた子には、どうか思いやりのある他人を助けることのできる子に育って欲しいと願うでしょう。しかし、国のトップの考えで、その願いが届かず、命を軽く見られてしまい、殺したくないのに殺したり殺されたりしてしまう、こういう悲惨なことが起こってしまっています。

これからの日本と世界をつくっていく子どもたちには、ぜひたくさん歴史を勉強し、たとえ国を代表するような人になれたとしても、国民の思いや家族が子どもに託している願いを忘れないで欲しいです。

矛盾！ なんで？

私もなぜ戦争をするのだろうと、「なぜ？」を聞きたい側でした。数見先生の文章を読んで、上の人の考えが変わらなければ戦争はたえず起こるのだろうなと思いました。ミサイルを飛ばす、領土を広げる、国をつぶす、といったことを考えるのだろう。なんで他国と寄り添い、国民すべての平和を願う政策を実行できないのだろう。なぜ、そういう人が国のトップにならぬで、戦争に向う人がトップになつてしまつたのだろう。「なぜ？」ばかりが頭に浮かび、「どうしたら？」の答えが見つからない。でも、やはりすべての国が武器を持たない、すべての国のトップが、自国の発展、自国が一番強いなどといったエゴ？を持つのでなく他国との調和やすべての人の平和を考えることが一番大事かと思えます。

なんで何もしていないのに上の人が決めて起こした戦争で、死ななければならぬのだろう。なんで命令でやりたくもない戦争に参加させられた人々が死んでしまい、上の人たちが警備されて生き残ることができのらう。そういう矛盾やなんで？という思いが強いです。

「半田秀文」先生。この名前をご存じの方はどれほどいるのだろう。間違いなく私を教師の道へ導いてくれた一人であり、私にとって数少ない恩師である。

半田先生との出会いは、大学の先輩Mさんの紹介だった。夏休みに子どもたちをキャンプに連れて行くというので、そのボランティアをしてくれないかとのことであつた。このキャンプとは、作並の奥新川で行っていたものである。山道を分け入つて、川（と言つても上流なので川幅は狭い）に崖の上から跳ぶなどして川遊びをするもの。崖と言つても、せいぜい高くて2m

くらいなので、危険性は低いのだが、子どもにとってはスリル満点。ジュニアリーダーの経験もない私にとっては、子どもと付き合うなんて初体験。しかし、終わつて帰つてきたら、毎晩その子どもたちの夢を見るくらい楽しく忘れられない思い出となつていた。「教師になつてみようかな」と思うきっかけになつた。

実は、私は特に教師になりたくて大学に入ったわけでもなく、「お金がそれほどかからない、国立で自宅から通える大学に行こう」と考えて、宮教大に入つていた。そんな私だから、入学後は五月病になりかけていた。そんな時Mさんに声をかけられて「中森合同研究室」に入つて、本当の意味での大学生活が始まつていた。そして、誘われたキャンプ。今にして思えば、人生の転機としか言いようのない運命の出会いだった。

そして半田先生が算数教育協議会に所属して、

算数教育の実践者であることもじきに知ることになった。キャンプの打合せは半田先生の鶴ヶ谷にある自宅の離れ（3畳ほどの書齋）で行つたのだが、そこに算数教育関係の本や資料がずらつとあつたのだ。子どもの頃から算数が好きで得意と自負していた私だが、半田先生と話していて、私の好きは「できる」から来るegoなものであつて、算数そのものは全く「わかつていない」（つまり、半田先生について行つて算数や教育について、具体的な話を聞くことが楽しみになつた。そうした中

わたしの出会つた先生 39

覚えていたい！ 「半田秀文」

という先生がいたことを

鈴木吉雄



ところで、なぜ夏休みに子どもをキャンプに連れて行つたのだろう。それは、きっと大自然の中で思いっ切り遊ばせることがどうしても必要と思つていたのである。一歩間違えば大事故につながるかねないスリル満点の強烈なインパクトのある遊びは、学校ではできない。子どもにも強烈な思い出となつて心に残る。知的な学習だけではなく、そうした大自然と遊ぶことで培われる子ども力（もしくは人間力）を味わせたかつたのだろう。キャンプに連れて行つていたのは自分のクラスだけ。学校の許可も取つていたとは思えない。しかし、一事が万事、良いと思つたことは貫き通す、そんな姿が学生の私には眩しく羨望の的であつた。

で、宮城数教協の例会に参加させてもらうこともあつた。私の手元に、1986年10月号の『数学教室』（国土社）がある。わり算の仮商の立て方をキャラメルと箱を使つて、筆算のアルゴリズムと一致させる分け方を子どもたちに発見させていくという、現在のわり算の筆算指導にもつながる大事な視点があつた。今にして思えば歴史に残る画期的な授業だつたと思う。その半田先生の授業を私も教室で参観させてもらった。この時の授業で受けた私の感動は、今でも算数教育を行う上での原点になつている。

半田秀文先生は、40代半ばでまだ幼い娘を残して、病に倒れて逝かれてしまつた。生きていれば、その後の日本の算数教育が変わつていたはずだ。どうすれば子どもたちは算数が分かるようになるのか、その要因を深い教材分析に求め、実践していた。そのスピリットは「スタンダード」では決して生み出せないものだ。その精神を（微かながらも）私は受け継がせてもらった（つもり）。正直、年月が経つにつれて半田先生との記憶や思い出は色褪せてしまつていく。でも、だからこそ、私の中に残っているうちに、こうして文に表して、私の記憶に改めて留めておきたかつた。そして、「半田秀文」という魅力的な先生がいたことを知つてほしかった。私にとっては出会えたことが宝物です。半田秀文先生、ありがとうございました。

（角田市・北郷小）

「だ液」の消化実験

～ジアスターゼやマイクロチューブを使って～

多田博茂

6年生の「動物のからだのはたらき」では、「食べ物」は口の中で別の物に変化するのだろうか」というデンプンの消化の実験が出てきます。この授業になるとちよつと憂鬱になります。人体の不思議を学ぶとても面白い内容なのですが、子どもたちにとつては、人前で「つば」を出して実験することに抵抗感があるからです。「誰のつばを使うの?」と実験前に子どもたちが実験グループの中でもめて険悪なムードになることさえあります。さらに、現在は新型コロナウイルスの流行でだ液を使うことは極力控えなければならぬ状況になっています。

そこで、今回は、だ液の代わりにジアスターゼを使う方法や、マイクロチューブを使うことで自分自身のだ液を調べる消化実験方法の紹介をします。

1 「消化酵素ジアスターゼ」を使用したデンプンの消化実験

だ液の代わりに「消化酵素ジアスターゼ」を用います。ジアスターゼは、「消化酵素」の一つです。ジアスターゼは別名 α アミラーゼとも言われます。デンプンやグリコーゲンなどの炭水化物を分解し糖に変換するはたらきを持つ酵素の総称をジアスターゼといいます。

ジアスターゼは体内中にも存在しており、主にすい臓やだ液腺から分泌されているので、必ずしも食品から摂取しなければならぬ酵素ではありません。けれども、ジアスターゼは胃腸のはたらきを助け消化不良を解消したり、胃酸をコントロールし、胃もたれや胸やけを防止したりするはたらきがあり、市販の胃腸薬

などにも配合されているくらいパワフルな効果を持っています。

つまり、だ液の中にジアスターゼが含まれているのでデンプンを糖に分解してくれるのです。

【準備】

・ジアスターゼ……ジアスターゼは薬局では単体で市販されていません。でも学校では、教材屋さんに注文すると研究や教育用として他の実験用薬品と同じように簡単に購入できます。

・コーヒードリツパーとペーパーフィルター

・片栗粉（小さじ1杯）

・薄いヨウ素液（ヨードチンキを薄めてヨウ素液の代用としてもよい）

・スプーン、割り箸、鍋、ビーカーの代わりになるコップ（コーヒースーパーでもよい）

【実験】デンプンのりをジアスターゼで消化してみよう

①デンプンのりをつくる。水100mlにかたくり粉小さじ1杯（約5g）を加える。お湯に入れてはいけない（料理と同様）。よくかき混ぜてからコンロで加熱する。

②あたためながらかき混ぜていくとデンプン溶液は、しだいにドロドロ状態になる。かき混ぜるのにもやや抵抗感がでてくる。デンプンのりの完成。

③コーヒーフイルターに、作ったデンプンのりを入れる。ドロツとしていてフィルターを通していかない。「食べ物」口に入れた直後の状態だね」と子ども

たちに説明する。

④ビーカーに残ったデンプンのりにヨウ素液をかけてみる。青紫色に変化するのを見せておく。「デンプンだ」。

⑤コーヒーフイルターの中のデンプンのりに、少量の水で溶いた消化酵素ジアスターゼを入れてガラス棒でそつと攪拌する。子どもたちには「囓んでだ液と混じった状態だね」と説明する。

⑥デンプンのりはしだいにサラサラに変化していく。消化していく様子が分かる。すると、フィルターを通過して、消化して水のようなものが出てくる。デンプンが麦芽糖に変わったものだ。水に溶けるものに変化した。水に溶けるもの（麦芽糖）になったので、コーヒーフイルターを通過しはじめたのだ。フィルターペーパーが腸の壁だとすると、それを通過するイメージになる。



⑦フィルターを通過した液に、ヨウ素液を入れてみる。青紫色にならない。デンプンではなくなってしまったのだ。それがよくわかる。これを煮詰めると水あめになり、デンプンが糖に変わったことが実感できる。

【消化酵素ジアスターゼ】を

使用した時の利点

① 児童に嫌悪感なく実験をさせることができる

このジアスターゼを使うことで、児童の実験に対する嫌悪感が軽減できる。ただし使うときには

・ジアスターゼはだ液と同じはたらきをする酵素であること

・同じものが体内でも作られていること（すい臓やだ液腺で作られる）

を強調して子どもたちに説明する。そうしないと「薬だから、デンプンが変化してもあたりまえ」「だ液ではなく薬のせいに変化した」と思ってしまう子どもたちが出てくる。

② トロトロからサラサラへの変化が見える

ご飯をもみ出した液でなく、ドロドロのデンプンのりを使う。これにジアスターゼを混ぜると、トロトロが水のようなサラサラに変化します。固形物から液体への変化が見せられる。

③ 腸の壁を通過するイメージができる

前記の実験をろ紙やコーヒーフィルター上で行うと、ドロドロの時はろ紙を通過しないが、消化されると水に溶けるものになってろ紙を通過することが示せる。水に溶ける物になるとコーヒーフィルターを通過する。デンプンのままでは通過しない。腸の壁を通過するイメージにつながる。

④ デンプンから糖へ変化したことが分かる

消化されてきた液は「麦芽糖」と

いう糖である。もちろんヨウ素液をかけても青紫色には変化せず、デンプンではなくなったことがわかる。さらにこの麦芽糖を煮詰めると水あめになって、ほんのり甘い味がする。無味のデンプンが甘い糖に変化したことが実感できる。この糖が人間の活動のエネルギー源になる。

⑤ 体内で化学変化が起こっていることが分かる

だ液のはたらきとジアスターゼ（薬品）による消化のはたらきは同じである。消化は人の体の中で起こっている化学反応なのだということが実感できる。

⑥ 唾液を使わないことの利点

・実験後の試験管の丁寧な洗浄が不要
・新型コロナウイルスの感染防止になる。

【消化酵素ジアスターゼ】を

使用した時の問題点

ジアスターゼを使ったこの実験はとてもよいのですが、やはり本物の唾液ではないということ。だ液と同じはたらきがあるとはいえ「クスリ」だから消化するのではないかと考える子もいます。

また、本当にだ液と同じなら自分のだ液でも試してみたいという子も出てくると思います。コロナウイルスを気にせず、自分自身のだ液の効果を見てみる実験が必要です。それが次の実験です。

2 「マイクロチューブ」による

唾液の消化実験

ふたの付いた小さなプラスチック容器のマイクロチューブを使うと自分自身の

唾液で調べられます。この方法だと実験でグループの雰囲気が悪くなることもありません。しかも、使用後はそのまま捨てることも可能なので衛生的です。



準備

- ① デンプン粉0.1g、水200ml。よく混ぜながら加熱し、アルファ化（トロトロの状態）にする。薄く感じるがこの濃さでも大丈夫。
- ② マイクロチューブ（1.5mlタイプ）に1mlずつ分注して児童に配布。1人あたり2本。

実験

- ① 片栗粉で作ったデンプンのりに、薄いヨウ素液を加えておく。
- ② マイクロチューブに入るように切った綿棒を

- ③ ふたを閉めてよく振り、体温 60°C 程度の湯につけて反応を促進させる。瞬間湯沸か

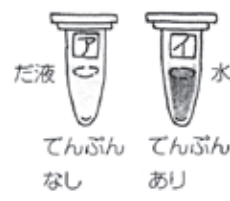


し器の湯でも十分な温度が得られる。

④ やがて、唾液を入れたマイクロチューブ

のヨウ素デンプン反応の色が薄くなっていけばOK。

⑤ ヨウ素液で青色になれば良いので、デンプン液は濃くないことが重要。



【マイクロチューブ】

を使用した時の利点

- ① 綿棒を使って、自分のだ液を採取し、マイクロチューブの中に密閉して実験することができます。実験後は児童から回収して、そのまま廃棄できるので、衛生的に実験できます。
- ② 先にヨウ素液を入れることで反応の進み具合を確かめることができるので、分かりやすい。
- ③ マイクロチューブは100本500円（1本5円程度）で教材屋から購入可能なので安価に実験できる。

※「実験に自信がない」「実験のやり方がよく分からない」という方は、呼んでくださればお手伝いに伺います。ご連絡ください。

参考図書資料

・『理科教室』（2008年6月号）

本の泉社

・『わくわく理科6』啓林館

（東北福祉大学・非常勤講師）



おすすめ映画

伊藤真弓



2022年

劇場版

荒野に希望の灯をともし

中村医師は、2019年の

12月にアフガニスタンで凶弾に倒れました。この映画の副題は、「医師・中村哲 現地活動35年の軌跡」とあります。

彼は、アフガニスタンで患者を診ただけではありません。大干ばつが襲った後に井戸を掘り、食糧不足に苦しむ人々をみて、用水路の建設に着手

します。その壮大な仕事に取り組み中村医師と現地の人々たち。それを支える日本人スタッフ。監督は、21年間ずっと中村医師を撮り続け、記録しました。

この一年、ロシアとウクライナの戦争を映像で見えてきました。一晩で町が壊され、人々が祖国を追われます。「力こそ正義」と侵略を続けるプーチン大統領のような人間がいます。一方で、荒野から畑に、砂漠を森にと掘り進め、結果を出した人間もいます。映像を観て、こういう人が現実にはいたことを知ってほしいです。肉体は消えても、その精神は引き継がれています。

今回紹介する劇場版では、同タイトルのDVDにはない、死の3年後、現地の人々により新しい堰が完工したこと、風に揺れる畑の葉、天に伸びる木々、溢れる水を前にはしゃぐ子どもたち、収穫の喜びを分かち合う人々、公園に描かれた巨大な肖像画の中村医師が、それらを優しく見守っている姿が記録されています。

この映画の仙台上映会が、6月8日(木)と9日(金)がおすすめです。6月8日(木)と9日(金)がエルパーク仙台で行われます。

(多賀城市・多賀城小)



読書のすすめ(第11回)

久保

健

おすすめBOOK



『個体発生は進化をくりかえすのか』

倉谷滋 著 岩波科学ライブラリー 2005年



1970年代から注目されてきた「子どものからだと動きの育ちそびれ」が、コロナ禍の下で加速されている。私は、この「育ちそびれ」を防ぎ、あるいはとり戻すために、はう・立つ・歩く・走る・よじ登る・ぶら下がる・投げ……の「全身での移動の動き」と「手に代表されるモノを操作する動き」の進化のみちすじを追体験する「動物の動きのまねっこ遊び」を推奨している。

その参考となったのが、井尻正二著『ひとの先祖と子どものおいたち』『子どもの発達とヒトの進化』にはじまる、さくらんぼ保育園での講演録『みんなの保育大学シリーズ』(全13巻、築地書館、1979~1987)である。

こうした取り組みの発想の基には、ヘッケルの「反復説」ないし「個体発生は系統発生をくり返す」という考え方がある。ただし、井尻も述べているように、「反復説」の対象は生まれてからの発達ではなく胎児期である。そして、その胎児期の「反復」についても、今日の「進化(系統発生)」と「発生(個体発生)」の科学では、「証明されていない」ドグマだとされている。

しかし、だからといって「進化」と「発生」の関係を問う考え方を葬り去ってしまっているのだろうか? 本書は、最新の分子生物学、細胞発生学、遺伝学、実験発生学、ゲノムレベルの知見などを総動員して、この両者の関係(成体の姿、胚の姿)に「似たところがある」ことの真相を解明する「大きな物語」の新たな再構築の可能性をめざす挑戦的な企てである。

本書では、まず「反復説」に至るまでのこの両者の関係を問う学説史をひもとき、さまざまな動物の胚と成体の発生の姿の「似ているところ」と「違うところ」を比較し、そうした現象が生じるのが「法則か傾向か、偶然か必然か」を検討しながら、「なぜ反復するようになるのか」の謎に迫ろうとしている。

乱暴にまとめれば、人間の胎児の発生過程で発動しているプログラムは単一のヒトゲノムから読み出されており、その途上でゲノムが魚類的なものから哺乳類的なものに変わっていくのではないことは明らかだが、発生の幾つかの段階で、適応のために「決して踏み外してはならないステップ」と「ある程度変化してもかまわないステップ」との絡まり合いの様相が変わっていく、つまり「発生プログラムもまた進化する」ということがキーワードになりそうなのだ。

そして、この問題の探求はなおも続く……。本書を読んでこの問題に関心を持たれた読者には、倉谷が反復説の網羅的教科書だとする『個体発生と系統発生』(グールド、工作舎、1987)および倉谷の近著『反復幻想—進化と発生とゲノムの階層性』(工作舎、2022)を(いずれも大著で難しいが)薦めたい。

みやぎ教育相談センター相談員 さとうゆきこ

RさんとKさん。共に小学5年生です。

2人は、相談センターで出会いました。口数の少なかった照れ屋の彼女たち。毎週の活動の最後に話し合います。

「次、どうする？」

「私ね、スライム作りをしたい」

「良いね、良いね」

「科学クラブで計画してただけで、行けなかつたんだ」

「いいよ。やろう！ その次は、簡単おやつ作り！ いい？」

話は、楽しく広がります。本当に嬉しいことです。

センターには、登校することに苦しんだり、何をしたいのか見つからず行き詰まりを感じている子どもたちが、通って来ます。小学生、中学生や高校生（通信制）も来ています。

そのうちの2人、RさんとKさんと、「小さな教室」を作りました。その「教室」の話です。

2人がそれぞれ、センターを訪ねて来たのは昨年の春過ぎた頃でした。

初めはRさん。登校がつらくなつてのことでした。続いて夏近しの頃、Kさんが訪ねて来ました。

2人は個別に、活動を始めました。Rさんの好きなことを探りながら、アニメ作りをしたり、物語を読んだりしました。Kさんの時間も、やってみ

たいことを聞きながら算数クイズをしたりしていました。

2人は毎週火曜、同じ日に時間をかえて来ています。時には、すれ違うこともあります。

そんなある日、

（……同じ学年、活動曜日も同じ、女子どうし、一緒にできないだろうか？ 新しい繋がりが作れないだろうか……）と、考えました。

「2人一緒に」と思い立ち、動き出すのに迷いもありました。それぞれ課題をもっていること、相談員の押しつけになるかもしれないこと、子どもどうしの気持ち近づき分り合うことができるかということなど、気掛りでした。

しかし、その心配よりも、子どもはやはり子どもどうしの繋がりがから力を得るのではないかと考えました。

家族に相談し了解をもらい、2人に提案しました。（会ってみない？ おしゃべりしてみない？ 一緒にやってみない？）と、……明るく真剣に話してみると、少し戸惑いもあるようでしたが、（会ってみたい……）と決心してくれました。

こうしてできたRさんとKさんと私の3人、「小さな教室」のようでした。「やりたいことは？」と聞き、活動スタート。少しずつ変化が起き、これまで私と向き合うだけだった2人に会話が生まれ、学校の情報交換ができ

時には互いの得意なことで教え合いが始まったのです。

活動内容も、広がりました。2人の要望で、毎日の暮らしにあるものをデザインしたり、新聞から言葉をさがして川柳づくりで騒いだり、ある日は単レンジ活用で物作りをしたり……。

「小さな教室」が始まって、2人が友だちになるのに時間はかかりませんでした。

こうして繋がった2人、今は1ヶ月先の計画を立てる程です。さらに学校に給食を食べに行く予定を話したり、好きなゲームの攻略法を教え合ったりして、互いに「天才！」と讃え合ったりしています。

「小さな教室」、これからの形を模索中です。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

土・日曜と祝日をのぞき10時から17時
ただし夏休みなど長期休業期間は、相談
センターも一定期間、休業日があります。
秘密は厳守します。相談は無料です。

ある産科医の死

千葉 建夫(センター運営委員)

「どうして手洗いをするの?」と聞いたら、「手にバイキンがついているから」と、小さな子どもでも答える。ところが、19世紀の半ば以前は「細菌」という概念も「消毒」という考え方も存在していない時代だった。医師は汚れが目立たない黒いコートのような着衣で手術に臨み、血や薬品で汚れた手はその裾で拭かれていた。

「手洗い」の概念を生み出したのは、ウィーン総合病院の産科医であったイグナツ・ゼンメルヴァイス。彼は産褥熱で多くの若い母親が命を落とすのは、死体解剖後に妊産婦を診察する医師の手に、「死体の何か」が付着しているのが原因と仮説を立てた。全ての医師や関係者に手洗いを徹底させると、死亡率はたちまち激減した。

でも、彼の「手洗い」予防法は、当時の医学界では認められることはなかった。「医師は紳士である、紳士は清潔である、よって医師が汚れているはずがない」という考え方が深く浸透していたからだ。彼は当時の世界最高レベルの医学界から追放され、失意のまま、精神病棟で誰にも認められず他界した。産褥熱の原因となる微生物の存在がパスツールによって発見されたのは、彼の死の14年後だった。

私たちの日常が、多くの先人たちの報われぬ苦労や努力の上に築かれていることを思うと、ものごとの「もともと」のことを考える「授業を大切にしていきたい。」

子どもの風景「作品について」……高橋 三代(宮城作文の会)

できないことを書ける意味

できなくなったこと／えっと思ったこと／いいなあと思ったこと／いやだなあと思ったこと／やったあと思ったこと／変だなあと思ったこと

「短い時間でも感動が」を詩にする授業から生まれた作品。

玉緒さんは、無口で親しく話せる友だちもあまりいない子だった。話すことが苦手な玉緒さんにとって、相手が見えない電話はよけいどきどきしただろう。子どもたちは、楽しかったことを書くことが多い。でも、珠緒さんは自分の嫌いなことを伝えた。苦手な電話から逃げ出さず「もしもし」と出たのだ。「こんなことかたんじゅん」と思っている子は、玉緒さんの作品から苦手な子の存在を知ることができた。身近にそういう子がいると知るとは、読んだ子の認識の扉を開いてくれる。苦しんでいる子に寄り添えるチャンスをもたらしたから、想像力を育ててもらったのだ。もう一方の洋さんは、とても体格のいい女の子だった。「何度も時計を見た」には、苦手なとび箱の時間が「早く終われ」の気持ちがよく表われている。

できないことを書いても、「そうだったんだね」と受けとめてくれる友だちのいる教室が、本当に安心して過ごせる場所なのではないだろうか。子どもの笑顔がたくさん見られる教室を今年も作ってほしいと願っている。

センターの動き

1月

- 14日 中森先生の長寿を祝う会
- 15日 宮城民教連・冬の学習会
- 17日 小牛田農林高で小森陽一さんの授業参観

21日 道徳と教育「安藤昌益・自然真営道」(その1)

藤田康郎さん講演会「子どもたちと平和について考える」

27日 事務局会議

28日 「教育」を読む会 研究部

2月

4・5日 宮教組(CO・DO)教研

6・7日 臨床教育学会メンバーとの会議

11日 2・11思想信条の自由を守る集会

18日 こくご講座『モチモチの木』(太田陽子)『大造じいさんとガン』(岩本大己)

23日 「教育」を読む会 研究部会

24日 市民の会「教育Cafe」事務局会議

25日 震災のつどい 報告「3・11 高校生の犠牲者調査から見えてきた教訓」講演「大震災が子どもへの育ちに与える影響」

27日 ゼミナル Study「リップマーン」

3月

12日 道徳と教育「安藤昌益・自然真営道」(その2)

18日 「教育」を読む会 研究部会

20日 ゼミナル Study「教育の未来へのスケッチ」

24日 事務局会議 つうしん・発送作業

編集後記

3年にわたるコロナ予防の対策がようやく緩和される。新学期、新たな出会いに希望が見える。4月の教師の大切なこととして、私は30代に次の10の行動を呼びかけていた。子どもは当然様々な問題を持ち、また起こします。そして、どんな子どもでも、できるようにになりたい、分かるようにになりたい、みんなと楽しく生活したいという要求を持っていきます。そんな子どもたちと共に生きる教師を目指して、私は次の事を行います。①体罰否定宣言しよう。②呼び捨てはやめよう。③子どもの話に耳を傾けよう。④目と手と言葉で話しかけよう。⑤私の気持ち・想い・感情を伝えよう。⑥得意なことを教室に持ちこもう。⑦子どもとできるだけ遊ぼう。⑧子どもと一緒に仕事をしよう。⑨困ったら、子どもに相談しよう。⑩子どもの苦悩に共感し励まそう。わからなくて、うまくできなくて困っているのは教師以上に子どもなのです。子どもに寄り添い、子どもの苦悩に共感し、子どもの伸びる力を信頼し、温かい励ましを絶えず送り続けます。子どもは、そんな教師の温かいまなざしと励ましを待っています。1年後、きつと子どもたちは先生との別れを惜しむでしょう。新学期、教師と子どもの信頼関係が築かれることを願っています。

(達)

